

教職大学院での実習のあり方を考える

大畑 眞知子

(京都市立藤城小学校)

1 教職大学院生の実習の概略

藤城小学校では、平成 20 年度から連携協力校として毎年 3～4 人の実習生を受け入れてきた。現在その中のひとりが本校で教壇に立っているように、京都市や他府県の教員として採用されて教育現場で活躍していることは実習校として大変うれしいことである。

大学院生としての初年度は、夏休み明けの授業開始時期から 15 日間、2 年目は 4 月の新年度開始時期から 35 日間の実習をしている。

2 実習における院生の学び

1 年目の秋には、小学校の大きな行事である運動会に向けて教職員とともに全校児童の指導もするなど、学部教育課程での実習を超えた体験をしてもらえる。6 年生の組体操の指導など担当学年を超えて係わり「練習の成果を出し切れた喜びで子どもたちと一緒に涙が出た」等の感想が聞けた。子どもを指導し喜びを分かち合う貴重な時を過ごすことができる。この時期に、教師として頑張りたいという確信を持ってくれる実習生も多い。

普段は朝の登校指導から教科・教科外の学習指導、給食・掃除・クラブ・委員会活動・部活動まで学校の教育活動すべてに係わって実習をしている。その中で、生徒指導の難しさを身をもって体験できることも多い。

また、各学年学級での実習だけでなく、職員会議・校内研修をはじめ時には学校運営協議会等にもオブザーバーとして参加し、職員研修や地域・保護者との連携の一端を知ることができる。

次の年の春 4 月からの長い実習では、新年度の学校が組織として動いてゆく様子、新 1 年生の受け入れや学級開きの担任の仕事の様子などをじっくりと観て、実習生自身もその日々の教育実践に関わるといふ貴重な体験ができています。さらに、4 泊 5 日の 5 年長期宿泊学習の引率者として参加してもらい、生徒指導的な観点からも子ども達の学びと成長を観察し実際に指導する機会としています。

授業力の向上に向けては、それぞれの研究主題に合わせた教科指導を、担当学年で単元を通して指導できるよう工夫して取り組んできた。公開授業は大学院の指導教授に参観していただくが、事前になるだけ多くの授業を実習生が参観し合い指導教員と共に事後研究する時間をできるだけとるようにしてきた。また、ICT 機器を活用して記録をこまめに残すことも心掛けています。

課題としては、学校の日々の実践の中で、様々な打ち合わせや教材研究の時間がなかなか取れないことである。それぞれの実習生の研究課題について担当教員が理解し十分な指導できたかという点については、実習校として課題が残る。

3 連携協力校となる意義について

藤城小学校は「情報活用能力を基にした生きる力の育成」と「開かれた学校・学校運営協議会を核とした地域連携」を学校教育の柱としてきた。様々なゲストティチャー・ボランティア・教育団体・企業からの支援など「外からの風」を取り込み、受けとめたことを子どもたちが再構成して発信する学びの活動を地域と共に実践してきた。連合教職大学院の実習校となり実習生を受け入れていることは、正に大きな「外からの風」となっている。

実習校としてスタートした5年前には、実習生の担当はすべて経験豊かな主任級で専門性をもつベテラン教員であった。しかし世代交代が進むここ数年は、実習生を採用10年未満の教員が担当することが多くなってきた。実習生への指導という面では、管理職や教務主任、ミドルリーダーが係わることが増え時間的な課題も出てきたが、実習指導として担当となった教員が指導に当たることで成長する姿が見られ、子どもたちも実習生の学ぶ姿に刺激され教室がいきいきとする。また、教員免許を取得している大学院生がほとんどであることは、支援者として自信を持って子どもを指導できるという利点もある。さらに同時期に本校を卒業した教育実習生、インターシップやボランティアで受け入れている教職を目指す学生達と、本校の若い教員が様々な場面で交流できるようにし、共に成長することにつながった。

4 今後の実習に向けて

実習校の立場から教職大学院での今後の実習を考えると、小学校現場の大きな世代交代の中で、「高度実践型教員養成」に対応していくことが難しいのが現状である。まず現管理職は数年で過半数が退職し、高度な実践指導力を待つ教員は現場から指導主事等として離れ、教員歴10年までの若手教員が半数を占める中で、大学院生が目指す高度な授業力・生徒指導力を身につける支援は、これまでのようにはいかない。実習に入る前に、大学院実習生はもちろん、受け入れ側の実習校もこれまで以上に目的意識を持って取り組む必要があると感じている。実習期間中にそれぞれの実習生が研究テーマを明確にして、実習に臨んでほしい。特に実習校の管理職や担当主任と教職大学院の指導教授との更なる連携が欠かせない。

また、実践フォーラムでは「即戦力となる教師」を期待する声が多く出ていた。現場が教職大学院での教員養成に、「即戦力」を熱く望むのは当然のことではあるが、私個人としては、とりあえず対応できる教員を目指すだけでなく、まさに高度職業専門人としてのたえ躓くことがあっても、真直ぐに子どもと向き合い「学び続ける教員」であってほしいと願っている。2年間の教職大学院での学びがそれぞれの「学び続ける力」を育み、さらに多くの厳しい教育課題が待ち受けるこれからの教育現場で、中核となり実践できる教員を養成していただけることを期待しています。